

## 連載

## 欧州から (8) 伝統ある前衛スタジオは今...

石井 紘美

Hiromi J. Ishii

City University UK

Dept. of Music

## 概要

この連載記事は主に欧州における現在の電子音響音楽に関する様々な活動や問題を電子音響音楽と一般社会、電子音響音楽と教育、電子音響音楽と現代音楽界などの観点からレポートしていく。

This article-series reports today's issues and activities associated to electroacoustic music in Europe from the viewpoints of "electroacoustic music and general society" "electroacoustic music and education" and "electroacoustic music and contemporary music society".

## 1. 『トーンバントマシーネ』

ドイツの電子（音響）音楽を背負う4つのインスティテュートを集めたフィルム『トーンバントマシーネ（テープレコーダーの意）』が2011年4月20日にケルンのLudwig美術館フィルム・フォーラム館で上映された。ケルン・メディア大学とケルン音大電子音楽スタジオの共同制作によるドキュメンタリーで、内容はケルンの西ドイツ放送局(WDR)電子音楽スタジオ、フライブルグの南西ドイツ放送(SWR)実験スタジオ、ベルリン工科大学(TU)電子スタジオ、そしてカールスルーエのZKMの4つのスタジオの歩みに焦点をあてたものである。ドイツの音大の電子音楽スタジオは数多くあるのだが、このフィルムではこれらは教育機関とみなして除外している。

WDR 電子音楽スタジオの元サウンドエンジニア(1971-2001)であったフォルカー・ミュラー (Volker Müller)、SWR 実験スタジオの元所長(芸術面担当、1984-2005)アンドレ・リヒャルト (André Richard)、ベルリン工科大学電子スタジオ元所長(1974-2009)フォルクマー・ハイン (Volkmar Hein)、そしてZKM 音楽音響部門の現在の所長(2003-)ルトガー・ブリュマー (Ludger Brümmner)の四氏へのそれぞれ別々に収録されたインタビューが話のテーマごと同時進行的にカット編集されて、四スタジオの持つ背景、方針やそれぞれが抱え対処

してきた問題、そして現在の活動などがそれぞれのスタジオで制作された電子音楽作品の挿入とともに浮き彫りにされる。

WDR スタジオ、ベルリン工科大、SWR スタジオは特に歴史が古い。電子音楽史の初期からその活動に関わってきた彼らの証言は、ドイツの電子音楽史のみならず世界の電子音楽史という観点からも大変興味深いものであった。巨大なアナログ機器を使っただけの当時の作品制作は、作曲家ひとりの仕事ではなかった。作曲家達は自らが機械を操作するのではなく、基本的にはスタジオに設置されたオーディオ機器を知り尽くしている技術者の様々な協力・機器操作のみならず音制作への助言も一によって始めて作品を作り上げることができた。

インタビューは、「初期の制作作業は極度な困難さを伴っていた。というのは、最初は機械がたった一つしかなかったから。たった一つの機械ではほとんど何も作ることが出来ない」(ハイン)「60-70年頃はそれぞれのスタジオが全く違った調整卓を持っていて、これらの中に何も統一された方式も互換性もなかった」(ブリュマー)といった電子音楽初期のスタジオの制作現場の様子から、70年大阪万博にも言及する。放送局附属スタジオであれば半年間の長期にわたる万博への技術者の出張は難しい一方で、ベルリン工科大電子スタジオは大学研究機関という立場故に参加可能だった経緯は、このスタジオがその後一気にドイツを代表する電子音楽スタジオとして認識されるようになった歴史を考えると興味深い。普段日本の側から見ている大阪万博での電子音楽イベントの裏側を見るというか、全く別の視点から見ることになり、おもしろい。

WDR については電子音楽の歴史とともにスタートしたメッカともいべきスタジオであり、日本でもよく知られている。こちらがシュトックハウゼンの本拠地と性格づけられるのに対しSWR フライブルグ実験スタジオは、長年ノーノの本拠地だったと言ってもよいだろう。現在ではZKMとともにコンクールやレジデンス提供を行っており、もっぱら西洋楽器とのライブ・エレクトロニクス制作に重点をおいている。一方ベルリン TUは

芸術系ではなく工科大学という環境ゆえに新しい電子工学技術は比較的速やかに導入され、また独自のサウンドシステム Wave Synthese の研究開発も行なってきた。音楽学生の教育目的ではなく DAAD との提携でプロの（主に海外の）作曲家達を客員作曲家として招き制作環境を提供すると同時に同学部学生達に対しての講座を開催してきた。このような背景で、長い歴史が一人の巨匠による独裁政権（？）で彩られるということは起こらなかった。また ZKM はこれらのスタジオの中で最も歴史の浅い機関（1989 年設立）であり、設立当時すでに「コンピュータを使ったデジタル・アートは存在し、中心的なテーマだった」（ブリュマー）。このためアナログからデジタルへの過渡期を経験することなくスタートしている。

現在のスタジオの有り方とは？作曲家達に何を提供できるのか？ブリュマーはこう答える。「作曲過程において個人の力では困難な部分、たとえばクオリティの高いマルチチャンネルの音響空間」。これはブリュマー自身が世界の電子音響音楽のトップを走り続ける作曲家であるからこそ今作曲家達が何を必要としているのかが実感として分かっている発言である。一方で WDR の元サウンドエンジニアであったミュラーが旧式の録音機材への愛着を捨てがたいが故に「これらを使ってまだまだ電子音楽制作が出来る」と発言するのと対照的であった。

## 2. 博物館化するスタジオ

フィルム制作の背景にあるのは WDR スタジオの去就。現在博物館化しているこのスタジオを、今後どうするのかという問題だ。というのは新たにケルン市にメディア・アート・センターを設立しようという動きがあるのだ。電子音楽スタジオとメディアセンターの両方を運営する余裕はないし、機能的にもダブっている。では現在の WDR スタジオはどうなるのか。電子音楽博物館として活用して行くのか。現在の機材は旧式のアナログ機器で、これらをもって現役スタジオとして活動させるのは無理があるのだが、機材一新にせよスタジオ閉鎖にせよ、旧機材は保管場所もなく廃棄処分するしかない。これは引退したとはいえ地元の名士でもあるミュラー氏に後足で砂をかけるようだという関係者達の思惑があるようだ。実際、ミュラー自身が上述のように旧機材のままのスタジオ運営持続に固執しているので問題を難しくしている。

欧州では過去数年の間に幾つかの伝統ある機関が存続の危機にさらされた。そのうちオランダの STEIM は世界中の関係音楽家達からの嘆願運動により危機を脱した。しかしフランス・ブルージュの IMEB は、再度にわたる予算カットのため活動を停止せざるをえなくなった。ジャン・クロード・リセをリーダーとする2度の嘆

願運動は功を奏さなかった。しかし実は IMEB の創立者であるフランソワーズ・バリエーとクリスチャン・クロジエ夫妻が高齢のため引退したかったのだという内部情報も伝わってきている。IMEB は彼らのもの、彼らの引退と共に閉鎖したい。が、別の名称で誰かが似たような機関をブルージュで立ち上げるのは多いにありという彼らの意向と、旧機関から新機関設立への移行が、州政府との間でうまく折り合わなかったのだというのである。自分たちが創設した機関だから自分たちのものだという主張は、IMEB が IRCAM や GRM とは異なりかなり個人経営的な機関であったことを思えば分からないでもないのだが、そうなる公的助成を長年受けて来た事実はどうなるのだろうか。引き際がよいと考えるのか随分身勝手なと考えるのか、それがフランス的な去る者の美学といわれれば、そういうものかと思うしかない。

何年前かに、やはり由緒ある某大学電子音楽スタジオ所長に就任したばかりの知人を訪ねた折り、やはり博物館と化している『伝統ある』スタジオの旧機材をどうするか、という話をしていたのを思い出すが、歴史のあるスタジオではどこでも直面する問題であろう。別のある大学付属スタジオでは初期の Mac から歴代コンピュータを保存し続けている。担当エンジニアによると、同大学スタジオで制作された古い作品群の修復、コピー、起こり得るトラブルで作品が失われないためにメディアの互換性を考えての対応だそうである。いつ、どんな機材や技術を、どのように改革していくのか。技術的な問題は常に創造活動の方向性に基づいているし、時代の歩みに沿った方針でなくてはならないだろう。その上で限られた予算で先端を歩み続けなければならない電子音楽スタジオや機関。改革や世代交代の時期手順を誤ると、将来の存続は危うくなる。

## 3. 著者プロフィール

### 石井 紘美 (ヒロミ・イエンチ・イシイ)

博士 (PhD. 電子音響音楽作曲/音響美学)。武蔵野音楽大学研究員を経て音響技術専門学校、尚美大学講師のちドイツ・ドレスデン音楽大学上級課程にてクセナキスの弟子であるヴィルフリート・イエンチに電子音響音楽を師事。Konzert Examen (音楽家資格試験) 合格後、英国から奨学金を得て 2001 年よりロンドン・シティ大学にてサイモン・エマーソン、デニス・スモーリーの指導のもと『日本伝統音楽との関係における電子音響音楽作曲』のテーマで博士研究。CYNETart、フロリダ電子音響音楽祭、英国 SAN・EXPO966、北京 CEMC、Musica Viva、ベルギー Musiques & Recherches、オランダ・ガウデアムス、イタリア EMU 祭など様々な音楽祭や音楽週間にて作品が演奏されている。